

エゴイズムとエゴセントリズム再説

——「自我」から「エゴイズム」への一つの提案——

岩佐 信道

目次

- 一、はじめに——自我没却の原理とは
- 二、前回の論文の要点
- 三、「自我」にかえて「エゴイズム」を
- 四、エゴイズムの表れとその本質の明確な説明の必要
- 五、エゴイズム克服の方法について

一、はじめに——自我没却の原理とは

この小論は、前回の、「エゴイズムとエゴセントリズム——自我没却の方法に関する一考察」（『モラロジー研究 第三七号』、一九九二年）で提出したモラロジーにおける自我没却の原理の概念的整理の試みと自我没却の方法に関する私案をもとに、その一部をさらに展開しようとするものである。しかし、その内容に入る前に、自我没却の原理とはどのようなものかについて、あらためて簡単に整理し、さらに前回の論文の要旨をまとめておこう。

モラロジーの創立者、廣池千九郎は、道徳の科学的研究の必要性を強く認識し、新しい精神科学としてのモラロジーを確立すべく、『新科学モラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』（以下「論文」と略記）を一九二六年に著した。その中で、廣池千九郎は、人間の精神作用と行動に見られる道徳性には、さま

さまざまな質的な違いがあるとして、それを大きく普通道徳と最高道徳の二つに分類した。前者は、人間の自己保存の本能に基礎をおく道徳で、後者は、いわゆる聖人の事跡や教説・教訓に一貫する慈悲の心に基づく道徳であるとされている。自我没却の原理とは、その最高道徳の五つの原理のうちの最初の原理として提示されているものである。まず、その簡単な内容を、モラロジーの入門レベルのテキストである『心づかいの指針』から引用しておこう。

私たちは、自己を保存し発達させようとするさまざまな欲求をもっています。飢えや渇きを満たそうとする欲求、人から愛され認められたいという欲求、自己を実現しようとする欲求などです。これらの欲求は、それ自体、善でも悪でもありません。しかし、これらの欲求は、しばしば自己の生存、発達に必要な限度をこえて自己中心的にはたらくことがあります。モラロジーでは、このように欲求が自己中心的に働く場合の心づかいを自我といいます。

これは一般にいわれる自我の目覚め、あるいは自我の確立という場合の自我とは異なり、他人や社会を顧みないで、ひたすら自分の欲求を満足させようとする利己心のことを指します。

では、自我は、私たちの生活の中でどのような現れ方をしているのでしょうか。たとえば、私欲、情欲、高慢、強情、負け惜しみなどの心づかいは、みな自我の著しい表れです。また、他人の気持ちや立場を考えないで自分勝手な言葉づかいや行いをするとか、失敗や失望のために極端にふさぎこんでしまふとか、物事にこだわるとか、人を恨むとか、不平を唱えて憤慨するとか、形式的にむやみに遠慮するとか、虚栄心が強いとか、落ち着きがないとか、他人に必要以上に干渉して世話をやくとか、人を差別するというようなことは、すべて自我の表れです。(『心づかいの指針』二四頁)

このように、モラロジーという自我とは、「自己の生存、発達に必要な限度を越えて自己中心的に働く心づかい」であり、「他人や社会を顧みないで、ひたすら自分の欲求を満足させようとする利己心」のこととされている。それは、廣池千九郎が、普通道徳もしくは因習的道德の根底に存在するとしたものであり、この概念を明確にすることは、最高道徳の実行の基礎として必須の事項といえるのである。

二、前回の論文の要点

さて、上記の九二年の小論では、この「自我」の概念に関して、次のような問題点を指摘したのであった。

① 廣池千九郎が、一九三〇年に著した『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』(以下『特質』と略記)においては、自我没却の原理の根底として、「自己保存の本能の原理」が極めて重要な位置を占めている。ところが、『特質』から約五十年後に出版された『モラロジー概説』では、自我の概念的説明において本能の議論は姿を消し、代わって欲求理論に基づく展開がなされている。しかし、果たして本能論を欲求論で置き換えることは適当かどうかという問題、

② 『概説』は、自我の説明概念としては本能論を放棄しながら、他方、社会構成の原理の要素としては、「本能」を「知識」、「道徳」とともに、相変わらず残しているといった理論的矛盾の問題、

③ 自我没却の原理の不適切な受け止め方により、人々の行動が消極的になるという問題への対応と考えられる自己感情肯定論と、自我没却の原理の意味するものとの異同を慎重に見極める必要、
などである。

そして、①の点に関しては、本能論を堅持することも一つの立場として、可能ではないかということを示唆し

ながらも、最終的には、「本能」という言葉のもつ「一定の生得的な行動のパターン」というイメージからくる理論的困難の故に、当面、「本能」という言葉を用いることは避けることがよい、という立場をとったのであった。そして、用語上の整理に関して、廣池千九郎が、人間の生存に必要な働きで、「道徳でも不道徳でもないもの」とした自己保存の本能は、「自己保存の本性」と呼ぶことにし、自我没却の原理における克服すべき対象としての自我は、「利己心」と呼ぶことにしてはどうか、という提案をしたのであった。

そこで今回は、さらに論を進めて、モラロジーにおいては、「自我」という言葉は用いないで、「エゴイズム」だけを用いることにしてはどうか、という提案をしようとするのである。そして、その上で、その「エゴイズム」の本質を、自己中心性にとらえる前回の立場をさらに展開して、自我没却の方法を一層明らかにすることをねらいとしている。

三、「自我」にかえて「エゴイズム」を

(一) 各種テキスト類に見る「モラロジーの自我」と「一般的自我」

「自我」にかえて「エゴイズム」を、という今回の新たな提案の背景には、自我没却の原理における「自我」の意味が、一般的な意味での「自我」との重複のため、あいまいになるという問題がある。そこで、まずモラロジーにおける「自我」という言葉の説明の仕方の違いを、発行年代を異にするいくつかの文献に見てみよう。

まず、廣池千九郎が『論文』執筆の数年後に著した『特質』においては、その第九章、自我没却の原理の初めに、次のような記述が見られる。

自我 (Egoism) とは人間の自己保存の本能の事であります。この本能が人間の精神の中に存在しておいて、

それが利己的に働いておつては、最高道徳がその人の精神に入りこむことができぬのであります。そこでこの本能を取り去ることが最高道徳を實行する基礎になります。(一六三頁)

ここで注目しておきたいのは、廣池千九郎が、「自我」をエゴイズム (Egoism) と置き換えており、今日一般に用いられているセルフやエゴの意味での「自我」の意味には全く言及していないことである。

次に、一九八二年に発行された『モラロジー概説』においては、

一般に自我とは、自我のめざめとか自我の確立などといわれるように、理性的自覚に立った行動の主体である自己を意味しています。これに対して、モラロジーでは、自己を保存し、発達させようとする欲求が、生存、発達に必要な程度をこえて自己中心的に働く精神作用をさします。つまり、モラロジーという自我は、他人や社会の利害を顧みないで、自分の欲求を満足させようとする自分中心の利己的な心づかいのことです。(一〇〇頁)

と述べている。ここには、モラロジーで意味する「自我」が、一般に用いられている意味から大きく乖離しており、このような但し書きなくしては、モラロジーという「自我」の意味を正確に伝えることができないという認識がはたらいっていると考えられる。

ところが、ごく最近のモラロジー・セミナーのテキスト『新しい自己の発見——自我没却の原理』(一九九四年)などを見ると、「一般的自我」への言及がますます多くなつてくるとともに、それとの区別がかなりはやけてきていることがわかる。たとえば、自我の意味を述べたその冒頭の部分では、まず「一般に自我とはへ自我のめざめ」とかへ自我の確立」などといわれるように、意識や行動の主体をさす概念です」(六頁)と、一般的な自我から説き起こし、その意味をかなり詳しく論じたうえで、

このような自我は、人間が人間らしく生き抜いていくための不可欠の生命力であるといえます。しかし、多くの場合、これらの欲求を充足しようとする自我は、自己中心的に働きやすく、行き過ぎて無理な欲望を追求することになりがちです。つまり、自我は、一面では自己の理想を実現していく強力な推進力となりますが、他面では、自己の利益のみを追求する利己主義（エゴイズム）に陥りやすく、また独善的な自己主張が強くなって孤立しやすい面もっています。（六一―七頁）

としている。つまり、人間の不可欠の生命力としての自我は、「自己の理想を実現していく強力な推進力」の面と、「自己の利益のみを追求する利己主義（エゴイズム）」の面をもっているとし、自我没却における自我は、その後者であるとしている。この点は、さらに次のように展開される。

モラロジーでは、右にみたような自我のプラスとマイナスの両面をもつ働きのうちで、主としてマイナスの働きをする自我をさして、単に「自我」と呼ぶことがあります。それは、他人や社会の利害を顧みず、自分本の欲望を満足させようとする心づかいと行いであり、いわば「問題とすべき自我」のことです。

さらにモラロジーでいうところの「自我」の中には、明らかに自分勝手な心づかいや行いはもちろん、さらには遠慮や我慢など自分では道徳的で善いと思う心づかいや行い、あるいは自己を向上させようとする中にも知らず知らず忍び込む高慢心や執着心なども含まれます。また、善いと信じて行うことでも、それを人に強要したり、他の考えや立場を認めようとしない偏狭な心づかいや行いも自我の現れとします。（七一―八頁）と説明している。

このテキストは、さらに論を進めて、「利己心は悪、道徳心は善である」とらえる「単純な善悪二分法で果たして複雑な人間精神の実相を把握することができるか」（二二頁）と問題提起し、さらに、「私たちがむしる善いことと信じて行っていることの中に「自己へのこだわり」や「自己へのとらわれ」が忍び込んでいる」（二三頁）ことを指摘して、「そうした自己へのこだわりやとらわれこそ、注目すべき自我である」（二三頁）としている。つまり、そこでは、モラロジーの自我の概念において重要なものは、明らかな悪としての利己心ではなく、一見善行や美德とされているような行為の背後に潜む、いわば灰色の部分にある、という立場から論を展開しているのである。

以上をまとめれば、「特質」では、「自我」とは、英語の「エゴイズム」にあたり、それは人間の自己保存の本能（もしくは利己的本能）である、とされていたものが、「概説」においては、本能論から切り離され、「一般的自我」への言及がなされた上で、それとは異なるもの、すなわち「自分中心の利己的な心づかい」とされ、さらに、セミナーのテキストに至って、「一般的自我」の一側面、それもマイナスの側面、として説明されているのである。

このように、自我没却の原理の説明において、当初のエゴイズム論が、次第に一般的自我への言及の度を深めてきた背景には、モラロジーにおける従来の自我（エゴイズム）論では、自我が全面的に否定すべきものとされているため、人々が、往々にして、「自分の全人格を否定されて、立つ瀬がない」と受け止めてしまうという問題があるのではないであろうか。そして、それへの一つの対策として、モラロジーにおける自我を、こうした一般的な自我の働きの一側面としてとらえ、「自我」の一部に肯定すべき領域を設定することは、十分意味のあることとも考えられる。

(二) 異なる概念には異なる述語を

しかし、基本的に意味内容の異なる二つの概念に対して同一の言葉を用いることは、決して好ましい事ではな

い。特に、一方を他方の一部とし、双方に重要な意味を付与する場合には、概念の混乱をきたし、結局、両者の関係の明確な理解を阻むことになるのである。ちょうど、それは、モラロジにおける「伝統」とは、「恩人の系列」の意味であり、そのために「オーソリノン」という学術語が作られているにもかかわらず、伝統の原理の議論において、伝統の一般の意味(tradition)との混同が見られる場合と類似している。このように、日本語の一般的な述語を用いてモラロジにおける特別の意味を表現しようとする場合には、両者の違いを十分自覚しておく必要があるのである。

ちなみに、モラロジを紹介した英語の文献では、「自我没却」が Renunciation of Self と訳されている場合がある。しかし、モラロジにおける「自我」を Self と訳しては、意味があまりにも広がりすぎて、モラロジにおける本来の意味が伝わらない可能性が大きい。言い換えれば、モラロジにおける「自我」を Self と訳すことは、既に見てきたような「概説」やセミナーのテキストにおける「自我」の一般の意味との区別のための配慮を無視することになるのではないかと思われる。それは、あたかも、モラロジの文脈で「恩人の系列」の意味で使われている「伝統」の訳語として、Tradition という言葉を充てることに似ているといえないであらうか。

また、「異なる概念には異なる述語を」ということは、次のような別の角度から論じることでも可能である。すなわち、自我没却における「没却」という言葉は、何か実体的なものを「取り去る」というイメージを私たちに抱かせがちである。しかし、モラロジという自我、すなわちエゴイズムは、心の働き方の特徴を示す言葉にすぎない。したがって、上記テキストにおいて「人間が人間らしく生き抜いていくための不可欠の生命力」とされているような「自我」、すなわち、人間が幸福を求め、自己実現を目指して生きることそれ自体と、その努力の現れとしての心の一定の働き方とを、同じ「自我」という言葉で表すことは、どうしても無理があるといわざるをえないのである。

ないのである。

そこで、このような問題に対処する一つの方法として、多義的かつあいまいな「自我」という言葉を用いるかわりに、モラロジにおける「自我」を意味する言葉としては、廣池千九郎が同義とした「エゴイズム」だけを用いることが、最善の方法と考えるのである。そうすることによって、モラロジにおける「自我」の意味が明確になるとともに、「一般に、自我とは……の意味であるが、モラロジという自我は……」といった弁解をする必要がなくなるのである。また、セミナーのテキストにおいても、結局、「注目すべき自我」、「問題にすべき自我」という形で、それ以外の好ましい自我と区別する以上、そして、時にはそれを「精神的欲望」とも捉える以上、それに対しては、一般の自我とは別の述語を充てるべきなのである。

ただここで、モラロジで問題にする「自我」を「エゴイズム」と呼ぶとすれば、それはあまりにマイナスのイメージが強すぎると懸念されるかもしれない。しかし、そのような心配は必要ないように思われる。廣池千九郎が自我(エゴイズム)として批判したものは、決して「自明の悪」ばかりではない。むしろ彼は、同情、親切、憐憫、義侠心や、自分の力以上に努力することなど、一般に普通道徳と考えられ、善いことと考えられてきた私たちの心の働きにエゴイズムを指摘したのであった。「単純な善悪二分法」はとっていないのである。その意味で、モラロジ・セミナーのテキストにおいて、「自分では道徳的で善いと思う心づかいや行い、あるいは自己を向上させようとする中にも知らず知らず忍び込む」と説明しているような人間精神の働きも、当然、「エゴイズム」という言葉に含まれると考えると差し支えないのである。

四、エゴイズムの表れとその本質の明確な説明の必要

(一) エゴイズムの本質をとらえない「もぐら叩き」

ここで再び『概説』における説明にもどらう。『概説』では、モラロジイという自我は、「他人や社会の利害を顧みないで、自分の欲求を満足させようとする自分中心の利己的な心づかいのことです」(一〇〇頁)と説明したあと、すぐに、それは仏教でいう煩惱、すなわち貪(物や名譽などを際限なく欲しがる心)、瞋(憎しみ怒る心)、痴(ものの道理をわきまえないで迷う心)にあたるとし、次の段落で「私欲、情欲、傲慢、強情、負け惜しみなどの精神作用は、自我の著しい表れです」と述べ、さらに続く段落で、「高慢心は、人間の欲望がいかに強いものであるかを表しています」と説明している。

このような個人の社会生活のさまざまな状況の中で問題とされる強情、高慢、遠慮などの精神作用や行為は、人間の品性向上という観点からすれば、当然、留意し、その改善に努めなければならないものであることは論をまたない。しかし、見方によっては、これらは、個人の個性や性格上の特徴であって、その範囲内である程度許容されるものとも考えられる。

また、これらの項目は、いくらか数多く列挙したとしても、それによってその本質を捉えたことにはならないといふ見方も可能である。たとえば、上にあげた強情、高慢、遠慮といった精神態度は、その状況によってさまざまな呼ばれ方をする人間のエゴイズムのいわば表現形態であって、それらの根底に存在するエゴイズムの本質を捉えないかぎり、問題の根本的解決にはつながらないのである。つまり、ある人が、自分より目上の人の前では、謙そんな態度をとってしようとも、自分より目下の人の前では、高慢な態度となり、全く知らない人に対しては、

遠慮がちに振る舞うのであるが、その必要のない家族に対しては、どこまでも強情を通す、というようなことはよくある。したがって、人間のエゴイズムを、個々の状況における表現形態においてとらえ、個々の欠点を抑え込んだり、取り去ろうとしても、それは、いわば「モグラ叩き」に終わってしまう可能性が高いのである。

また、このような人間のエゴイズムの本質を捉えないでの「モグラ叩き」は、往々にして、角を矯めて牛を殺す結果にもなりやすい。これは、前の論文で、社会教育の現場における感情・欲求肯定論の背景としてとりあげ、問題提起したものである。つまり、従来の自我没却の原理の誤った受け止め方は、人々の、のびのびとした自然な活動を抑圧し、行動を萎縮させ、消極的にしてしまう傾向が見られる。このような傾向への対処として、厳しすぎる道徳観を和らげ、抑え込まれていた感情や欲求に気づかせ、それを受容することを奨励する動きも最近は見受けられる。しかし、この角を矯めて牛を殺すこと自体、そもそも人間のエゴイズムの本質を捉えそこなったことからくる問題であって、自我没却の原理そのものの問題ではないのである。

(二) 人間のエゴイズムの本質をとらえる必要

以上のように、自我没却の原理が、人間のエゴイズムの本質をとらえないで、その表現形態の是正、解消に力を注ぐとすれば、それは、決して意味のないことではないとしても、現代人にエゴイズムの問題を真に深刻な問題として受け止めさせることはできないのではないか。したがって、また、自我没却の原理が、現代社会の深刻な諸問題の解決の手がかりとなることもできないのではないであらうか。

そこで、自我没却の原理の課題は、現代社会におけるさまざまな社会病理的現象そのものが、まさに人間のエゴイズムの表れであり、人間一人ひとりのエゴイズムの克服なくして、その根本的な解決は不可能であることを

説得力ある仕方では論じる必要があるのである。たとえば、民族や宗教の対立に基づく紛争、人種差別、環境問題など、人類が直面している多くの問題は、私欲、強情、負け惜しみ、高慢心など、個人の道徳的、性格的短所云々の問題ではないのである。もちろん、個人的な道徳的、性格的欠陥がこうした問題に直接、間接に深いかわりのあることはいうまでもない。しかし、これらの問題を、人間のエゴイズムの問題として、その本質を問題にしないかぎり、モラロジーは、個人的修養法の一つにすぎなくなるかもしれないのである。

(三) エゴイズムの本質としての自己中心性(エゴセントリズム)

では、モラロジーにおける自我、すなわち人間のエゴイズムの本質とは、どのようなものといえよいか。私は、上にあげたような現代世界のさまざまな問題にしろ、あるいは強情、高慢心、遠慮などの個人的特質にしろ、その根底に共通に横たわるものとしての人間のエゴイズムの本質は、人間の自己中心性(エゴセントリズム)と呼ぶほかないと考えている。この「自己中心性」もしくは「自己中心的」という言葉は、すでに引用したモラロジーの文献の中でも、断片的には用いられているのであるが、自我(エゴイズム)および自我没却の説明が、それを中心概念として、組織的に展開されてはいない。

すでに前回の小論で述べたように、自己中心性とは、発達心理学において、ピアジェなどが組織的に研究した概念である。元来、それは、子どもの認識や思考に見られる特徴であり、子どもが、物事を認識する際、他にもさまざまな見方や立場があることに気づかず、ただ自分の立場からしか物事を見ることができない状態のことである。そして、自分の認識や考えが、自分の置かれた立場によって大きな制約を受けていることすら自覚していない状態を意味している。

たとえば、テーブルの上に、形も大きさも異なる三つの物体A、B、Cが散らばって置いてある状況を考えてみよう。このテーブル上の物体の見え方は、正面から見ている者と、反対側、あるいは右側や左側から見ている者とは、全く異なるはずである。もし正面からは、左からA、B、Cの順に並んで見えているとしても、向こう側からは、その逆で、Aは、右端に見えるはずであるし、また、テーブルの右側にいる者には、Aは、Bの陰にも、自分たちと同じように見えていると思いつく傾向がある。そして、自分たちに見えている見方は、たまたま自分が正面にいるからである、ということにも気づいていないのである。彼らは、正面から別の場所へ移ってテーブルをながめることによって、初めて、正面で見たのとは違う見え方があるということに気づくのである。発達心理学では、子どもたちの思考におけるこのような制約は、小学生のある段階で次第に克服されていくとされている。

しかし、このような子どもたちの思考の特徴としての自己中心性をもう少し広く考えれば、それは、決して子どもの一時期の特徴にとどまるものではない。むしろ、それは、大人たちの行動にこそ一層顕著に現れているということができるのであるであろうか。さらに、大人たちは、社会を実際に動かしているが故に、その影響は一層深刻な問題として現われるということができるように思われる。

言い換えれば、大人たちは、広い意味での自己中心性を決して克服してはいないのである。そうして、物事を自分の狭い視野からとらえ、全体としての調和の実現を考慮することなく、自分の利害や感情に基づいて事態に対処する大人たちのこの傾向こそが、社会のあらゆる面におけるいざこざや争い、対立や紛争の根源となっているのである。発達心理学でいう狭い意味での自己中心性は、子供が児童期から青年期において克服されるのであ

るが、大人にも見られる広い意味での自己中心性の克服は、まさに人間の生涯をかけての課題といえることができるのである。

このように考えてみると、エゴイズムの克服は、人間社会の基本的な課題なのであって、モラロジーにおける自我没却の原理は、個人の性格や行動におけるさまざまな短所、欠点を修正して、品行方正な個人を作り出すことを主な目標とするものではないと考えられる。廣池千九郎が、「特質」において、他のどの章よりも圧倒的に多くの頁を費やした第七章は、上・下に分かれており、上では「人間の自己保存の本能の原理」を、下では「利己的本能と実際問題」を論じているが、この章は、まさに、人間社会における諸問題の根底に人間のエゴイズムがあることを論じたものであった。私は、そのようなエゴイズムの本質は、これまで述べてきたような意味での人間の自己中心性と呼ぶ以外にないと考えている。自我没却の原理は、この自己中心性の現れとしてのエゴイズムを直視し、個人個人の内面の意識変革によって、根本的に解決することを志向したものと見えるのである。

五、エゴイズム克服の方法について

(一) 「概説」における「自我没却の方法」について

以上のように、自我没却の原理における自我とは、エゴイズムであり、その本質を自己中心性として捉えるとすれば、自我没却の方法も、自己中心性克服の過程を明らかにすることによって、自ずから明らかになると考えることができる。しかし、その方法について論じる前に、これまでのテキストにおける自我没却の方法についての説明を簡単に見ておこう。

『概説』においては、「自我没却の方法」として、「欲求の浄化」、「法則に従うこと」、「道徳心の進化」の三つがあげられている。しかし、この三つの項目は、それぞれきわめて漠然とした内容であり、エゴイズムの克服を目指す人々の努力の具体的な手がかりとなるようには考えられない。最高道徳の他の原理に関して十分な予備知識のある人には、こうした説明が意味深く受け止められるかもしれない。しかし、自我没却の原理について初めて聞いた人にとって、このような説明は、その理解に役立つかどうか疑問に思われるのである。

なぜなら、たとえば「欲求の浄化」ということは、意味内容において、「自我の没却」とほとんど類似の言葉にすぎず、「欲求を浄化する」とはどのようにすればよいかということに関して、理解が進むとはいえない。次に、「法則に従う」ということも、「自我没却」よりも、むしろ意味内容が広く、抽象度が高い表現である。そのために、人々は、実際には、「どの法則に?」、「どのようにして?」といった疑問を抱くことになって、自我没却の方法を説明したことにはならないと考えられる。さらに、「道徳心の進化」についても、その内容として述べられている「慈悲心の実現」ということは、自我没却の原理の後に論じられる「慈悲実現の原理」を待たなければならぬのである。このような説明には、エゴイズムの本質に関する考え方が必ずしも明確でないことからくる根本的な問題があるように考えられる。

(二) 自我没却の方法としての自己中心性の克服について

私の九二年の小論の第五節は「自我没却の方法としての自己中心性の克服について」と題されている。すでに述べたように、エゴイズムの本質を自己中心性(エゴセントリズム)と捉えることによって、エゴイズム克服の方法も、より具体的に、誰にも分かりやすい形で提示することが容易になると考えたのであった。

自我没却とは、自己中心性を徐々に脱していくことであるとすれば、それは、要するに「すべての物事を自分

の狭い視野からのみながめることなく、できるだけ多くの立場を考慮し、全体の建設という観点から物事に対処する」ということになるであろう。それには、次のようなくつかの手順が含まれるのではないかと考えられる。それぞれについて若干の説明を試みてみよう。

① 自己中心的傾向への自覚

発達心理学が示しているように、自己中心性の特徴の一つは、自分の考えや行動が、自分の置かれた立場そのものによって大きな制約を受けていることに対する自覚が欠如していることである。子どものみならず、大人においても、物事に対する自分の態度が、自分だけの偏った見方によって大きな制約を受けているという自覚は、決して十分なものではない。そして、このような自覚の欠如が、人間関係や集団と集団との間の軋轢につながるとともに、そうした問題における根本的な解決を妨げているといえよう。

廣池千九郎は「論文」において、慈悲の心のない自己本位の行動の例として、昔の汽車による旅行において、健康な者が、周囲の病者や弱者、老人などの事情を考慮せずに窓を開き、自分だけが快を貪ることをあげている。私たちは、日常、周囲への配慮が足りないために、知らず知らず、人に迷惑をかけたたり、争いに至るといようなことは数え切れないほどあるであろう。そして、そのような場合、特に問題なのは、私たちが、自分のそのような自己中心性に気づいていないということであり、そのために、事態は一向に改善しないということなのである。したがって、自分が自己中心的になりやすいという問題を、知的によく理解し、絶えず反省する習慣をつくることが大切となるであろう。「自己反省」とは、このような意味での自己中心性に対する反省と考えることもできるように思われる。

また、私たちの自己中心的傾向は、特に自分とは異なる集団に属する人々への態度に表れるものである。私たちは、そうした人々の発言や行動を、自分の立場から感情的に判断して、批判したり、嘲笑することも少なくない。そして、そのような自分の態度に反省を加えるということとは、なかなかできないものである。周囲の状況が、そのような雰囲気包まれている場合には、特にそうである。廣池千九郎は、そのような人間の自己中心的な行動の問題点を次のように鋭く指摘している。

いずれの国に行き、いずれの階級に接してみても、みな相互にその感情・主義・意見・信仰・慣習・生活の程度その他すべて自己と異なるものに対しては、これを軽蔑し、これを嘲笑し、もしくはこれを憎悪するのであります。たとえば、言語の相違する場合、都会人は地方人を笑い、化粧せざるものは化粧するものを笑い、粗服を着るものは美服を着るものを笑うがごとき類であります。これみな正義の標準よりせる正しい批評ではなくして、利己心の発現たる利欲と高慢との精神作用に基づく極めて愚劣なる人間の行為であるのです。

(「論文」⑦九二頁)

したがって、私たちは、とかく自分の狭い見方から物事を決めつけたり、感情的に行動しがちであるということとを絶えず自覚するとともに、そのような自分を、一歩さがって見つめ直すゆとりをもつことが自己中心性の克服の第一歩なのである。

② より大きい空間的、時間的広がりの中で考える

自己中心性の克服を目指す努力の次のステップは、自分を、より大きい空間的、時間的広がりの中で考えることである。今日、私たちは、空間的にも、時間的にも、非常に広い範囲の人々との深いつながりの中で生きてい

る。そのつながりは、極めて複雑な相互依存関係ということもできるであろう。個人の生活でさえ、その国の置かれてある政治的、経済的状況に大きな影響を受け、さらにまた、もっと大きな国際情勢の影響を受けているのである。あるいは、自然環境にしても、私たちは、極めて多くの人々、そして多くの生物と、環境を共有しているといえる。経済においてであれ、環境においてであれ、私たちの一挙手一投足が、直接・間接に世界中の人々に影響を及ぼしているといっても過言ではないのである。

次のようなある男性の経験は、私たちが、非常に多くの人々との相互依存関係の中で生活しているという、日常ではあまり意識することのない事実を思い起こさせてくれる。それは、奥さんが留守のために、その日の夕食を自分で作らなければならなかったある男性の話である。彼は帰宅の途中、スーパーに寄り、油で揚げればよいようになっていたアジフライを買った。家に帰ると、油を熱して、それを揚げ、子どもと共に「お父さん手作り」の夕食を済ませたというのである。子どもも、父親の揚げたアジフライを「おいしい」といって喜んで食べたという。ところが、その男性は、数日後、テレビで、東南アジアのタイの若者たちが、海でアジの漁をしている風景と、若い女性たちが、町工場でそれをフライに調理している風景を目にしたのであった。そして、先日食べたアジフライのことを思い出して、「自分が作った」と思っていた夕食に、見ず知らずのタイの人々がいかに多くかわっているということを思い知らされたというのである。これは、ただ一つのエピソードにすぎないが、よく考えて見れば、アジフライのみならず、私たちの生活には、衣食住を初めあらゆる面で、多くの人々がかかわっているのである。

したがって、私たちににとって重要なことは、自分が、さまざまな人々と非常に深いつながりで結ばれているという事実を目を開いていくとともに、そうした人々も、自分と同様、それぞれ、幸せを求めて、一生懸命に生きていくということに思いをいたすことである。言い換えれば、お互いは、縁あって、この地球上で、共に生きている者であるという認識が大変重要なのである。そのような認識をもてることが、深く結ばれたお互いの立場を、考慮しあい、尊重しあうようになるための極めて重要なステップなのである。モンゴルには、家畜を襲う狼を決して根絶やしにしない習慣があるという。それは、狼が襲うのはケガをしたり病弱な狼であって、狼によって家畜の病気が群全体に広がるのが防がれているということを知っているからだという。そのようなモンゴルの古老の一人が発した次のような言葉には、激しい競争社会に生きる現代人が忘れていく英知が見て取れるように思う。「狼は、家畜にとって医者のようなものなんです。狼も人間も、天から命を授かって、大地の恵みを受けている仲間じゃないですか。そんな仲間を失いたくないんです。」

こうして、自分を広い世界の中に位置づけて考え、行動するということは、自分を、空間的な広がりばかりでなく、時間的広がりの中でとらえること、すなわち歴史の流れの中で自分と自分の行動を考えることをも意味する。それは、自分の行動が将来どのような結果をもたらすかを常に考えながら行動するということであり、また、自分は、自分の前に生きた親や祖先あるいは先人の願いや伝統などを継承し、自分より後に生まれてくる子孫や次の世代の人々への責任を考えて行動するということなのである。

③ より広い範囲の「他者」の立場に身を置いて考える

私たちは、どのような相手であれ、そのつながりが深いほど、その相手のことを親身になって考えることができるものである。たとえば、遠い国で起こった大きな事故や災害の報道に接したとき、その悲惨さに目をつぶり、心を痛めることはあるとしても、そのために夜も眠られないということはないであろう。しかし、もし、自分の

身内がその国を旅行中で、その事件や災害に巻き込まれた可能性が高くなると、事態は一変するであろう。エゴイズムの克服においては、物事を自分の立場だけから考えるのではなく、その事態にかかわりのあるさまざまな他者の立場に身を置いて考えるということがその重要な要素である。私たちは、上で述べたように、極めて密接な相互依存関係の中で生活しているのであるが、それにもかかわらず、他者の気持ちや立場を、自分のことのように考慮できる範囲は極めて限られているといえるであろう。

『論文』には、『沙石集』の一節が引用されている。和州の山里の百姓が草堂を作り、供養のため、お坊さんを招いたという。その願文の回向の言葉を聞いて「この堂は、死んだ婆さんのために苦勞して建てたものなのに、この功德をすべての衆生に分け与えたとすれば、婆さんの分は、萱一本分にもなりそうにない。どうか私の婆さんのためだけにお願ひします」と注文した。お坊さんは、「功德は回向すればするほど大きくなり、なくなることはない。お婆さんの御霊の功德も大きくなります」と答えた。それを聞いた百姓は、「それはめでたいことでございます。しかし、隣の三郎検校と申す者だけは除いてください」と訴えたというのである。私たちにとって、親身になってその立場を考え、その幸せを願う人々の範囲を広げることが、決して容易なことではない、ということ物語るエピソードである。エゴイズムの克服をめざす私たちは、たとえそれが容易ではないとしても、その人の気持ちや立場を考慮し、自分の行動の中に組み入れることができるような人の範囲を次第に広げていく努力を積み重ねることが必要なのである。

この「他者の立場に身を置いて考える」ということは、ロール・テイキング(role-taking、役割取得)と呼ばれるっており、道徳性発達論において重要な位置を占めている。たとえばコールバーグは、道徳性の向上を促す最も重要な要素は、道徳問題の考慮において、自分を他者の立場において考えるという意味での役割取得の機会であるとした。セルマンは、その役割取得の能力の向上のプロセスを研究し、理論化した。彼は、役割取得の範囲は人間の成長とともに、広がり、その程度は深まっていくことを明らかにしている。

物資や人的交流が世界的規模で拡大している今日、自分とかわりのある他者とは、決して日常に接している人々ばかりではなく、予想外に広い範囲にわたるはずである。したがって、この意味でのエゴイズム克服には、無限ともいうべき空間的、時間的広がりがある。エルウッドは、「社会を構成するものは、精神的相互作用もしくは精神面における個人間の機能的相互依存関係である」といつているが、私たちが、エゴイズムの克服をめざして、立場を考慮する人々の範囲を拡大していくことは、真の意味での人間社会建設の第一歩といえるであろう。

④ 全体の建設と調和に心を配る

エゴイズムの克服をめざす努力の次のステップは、他者の立場を個々に考慮するばかりでなく、かわりのある人々や事態を全体的にとらえ、全体の建設と調和という観点から考えることである。自己中心性は、物事全体を視野に入れ、個々の存在にそれぞれ所を得せしめて、全体としての向上と発展を考えるようになるとき、ほぼ完全に克服されたということができよう。しかし、このような段階におけるエゴイズム克服の努力は、決して容易なことではない。そこでは、必ずモデルが重要な役割を果たすことになるであろう。

言い換えれば、そのような努力の過程で見えてくるのは、既に自分より以前に、自分の自己中心性を克服し、広い視野に立つてものごとを考え、より大きい全体の建設に努力している人々の存在である。これは、モラロジ―でいうところの義務先行者であり、「伝統」と呼ばれる恩人である。このような人々の存在と働き、さらにはそ

の精神に気づくことは、この段階でのエゴイズム克服の努力に、具体的な手掛かりと方向性を与えられることを意味する。それは、一方で、これまで自分が、そのような人々の努力に支えられ、育まれてきたにもかかわらず、自己中心性の故に、何らその事実気づかなかつたことに対する反省的自覚と、他方で、これからは、自分もそのような働きに参画させてもらいたい、そうさせてもらわなければ申し訳ないという気持ちへとつながっていくであろう。ところで、この段階での努力も、私たちの置かれている境遇や能力によって、実際に手掛けることのできることはさまざまである。しかし、たとえ実際に自分に行うことは些細なものであるとしても、それをどのような全体像の中に位置づけるかによって、その意味は大きく違ってくる可能性がある。廣池千九郎が、話や著述の中で、常に「世界の人心開発救済」という言葉を使っていたのは、決して大言壮語ではなく、彼の思考や行動が、常にそのような大きな全体像の中に位置づけられていたことを物語っている。そして、地球上のすべての存在が一つの運命共同体であるとの認識が深まりつつある今日、私たちの意識におけるこの全体像の中に、人間のみならず、他の生物や自然環境を含め、まさに地球全体が含まれることが求められているといえよう。

⑤ 「三方よし」の実現をめざして

以上、自我没却の方法として考察してきたエゴイズム、すなわち自己中心性の克服の努力の過程で見えてくるものは、自分も含め、すべての存在が、相互依存と相互扶助のネットワークの中で支えられて生きているという事実である。そして、その事実の認識から、自分も全体の調和と建設のために貢献したいとの自然の願いを実行に移すことによって、私たちは、支え合って生きる喜びを心から味わうことができるのである。こうした全体の調和と建設をめざしての努力は、いわゆる「三方よし」の実現をめざしての努力といえることができる。なぜなら、

「三方よし」とは、「自分」と「相手」と「第三者」の調和と発展の実現をめざすものであるが、この「自分」と「相手」と「第三者」のそれぞれが、単数の場合もあれば、複数の場合も考えられ、さらにその複数も、小ささまざまな規模の集団が考えられるからである。そして、究極の「第三者」としては、地球上の人類や地上のあらゆる生き物といった範囲を考えることもできるのである。結局、「三方よし」の実現をめざしてのエゴイズム克服の努力は、人間として止むことのない生涯にわたる努力といえることができるのである。

〈参考文献〉

- Flavel, J. H. *The Developmental Psychology of Jean Piaget*. Van Nostrand Company, 1963
- 波多野完治編『ピアジェの発達心理学』国土社、昭和四十年
- 廣池千九郎「新科学モラロジー及び最高道徳の特質」道徳科学研究所、昭和五年
- 廣池千九郎「新版道徳科学の論文」廣池学園出版部、昭和五十七年
- 岩佐信道「支えあう喜び」「れいろう」平成七年十一月号、廣池学園出版部
- Kohlberg, L. *Stage and Sequence: The Cognitive-Developmental Approach to Socialization*. in D. A. Goslin, ed., *Handbook of Socialization Theory and Research*. Rand McNally, 1969
- モラロジー研究所編『モラロジー概説』廣池学園出版部、昭和五十七年
- モラロジー研究所編『心づかいの指針——モラロジー研究のすすめ』廣池学園出版部、昭和五十八年
- モラロジー研究所学習ソフト開発室編集・発行『新しい自己の発見——自我没却の原理』平成六年
- Selman, R. *The Growth of Interpersonal Understanding: Developmental and Clinical Analysis*. Academic Press, 1980